BAND SCORE



ラット●ダンシング・アンダーカヴァー

WATANABE
MUSIC PUBLISHING CO., LTD.

DANCE

ダンス

by S. Pearcy, R. Crosby, W. DeMartini, B. Hill

■この曲のポイント

GUITAR：両方のギターとも、ハード・ディストーションのかけられた音による演奏だ。Gt-Iはコードによるバッキング・リフ、Gt-IIはソロ・フレーズを中心に採譜してある。Gt-IIのイントロ1でのフレーズは、リズムが複雑なので注意しよう。ここは、オルタネイト・ピッキングで正確なリズムを心がけてもらいたい。ギター・ソロでは、ダブル・チョーキングのフレーズや、16分音符を使った細かいフレーズが数多く出てくる。しかし、フィンガリング的に難しいものはないはずだ。基本的なテクニックをしっかりと身につければ問題ないだろう。

BASS：この曲は基本的には8ビートなのだが、途中で¾拍子や⁵⁄₄拍子などの変則的なリズムが出てくるので注意が必要だ。弾いているフレーズ・パターンは、イントロ1では長く伸ばす音を中心にしたもので、イントロ2では8分音符を使ったノリの良いもの、という具合に部分部分でフレーズに変化がある。どのようなパターンでも譜面のリズムどおりに、正確にプレイしてほしい。

DRUMS：イントロ1ではベースやGt-Iと合わせたシンバル、バスドラの他に、ロールを使ったスネアが効果的に入っている。この音にはディレイがかけられていて、インパクトのある音に仕上がっている。かなり力強く叩いた方がいいだろう。また、ベースのところでも述べたが、この曲では途中で¾拍子や⁵⁄₄拍子の小節が出てくるので注意すること。ひとつひとつの音をパワフルに叩いて、ノリの良いビートを出そう。



❶(Gt.)：このフレーズは、1音1音オルタネイト・ピッキングで歯切れよく演奏しよう。ディレイがかかっていることにも注目。

❷(Ba.)：ここはGt-Iとユニゾンのリズムだ。長く伸ばす音は、途中で音が切れないように注意して弾こう。¾拍子の小節もあるので、リズムを見失わないように。

❸(Dr.)：ロールを伴ったスネア打ちだ。ここはエコー処理された音が使われているので、かなり迫力のあるサウンドになっている。



❹(Gt.)：ここはギター・ソロ。かなりブライトな音質でプレイしている。ダブル・チョーキングを使ったフレーズや、16分の速いフレーズも出てくる。チョーキングやグリッサンドなどの基本的なテクニックを使って確実にプレイしよう。

❺(Dr.)：この小節は¾拍子になっている。リズムのとり方に注意しよう。



❻(Ba.)：４小節パターンの繰り返しになっている。全く同じパターンを演奏しているのではなく、少しずつ音が変わっている点に注目してほしい。

❼(Dr.)：ハイハットのオープンとクローズを効果的に使っている。メリハリをつけてプレイしよう。


C D G A
With Chorus
Vo.
bi - g ci - ty girl You — have dreams — to ma - ke it big — Right off the
ten to — one It's ge - tting late you wo - rry' bout a date still you
Gt.-I
P.
gliss.
Gt.-II
Ba.
Dr.
G(onC) G(onB) G A
With Chorus
Grey hou - nd bus Ro - - ses come — from e - - ve - ry - one — You've go-nna
have no - one Twist — of fate — you know — it's too late You turn on
Arm.
gliss.


C B G C 1. D C D C
With Chorus
B
have yourself — some fun —
eve - ry — one —
(1,2,) When — it's all done you bi - te your tongue You're
Vo.
Gt.-I
Gt.-II
Ba.
Dr.
P.
Arm.
gliss.
C D C D C D
With Chorus
feel-in' so — young no — co-ver ups You're ne-ver a-lone — if you hear the call — It's



❽(Ba.)：ここは5/4拍子だ。カウントがとりにくいので、他のパートとも合わせて、正確に弾こう。

❾(Dr.)：5/4拍子なので、最後の拍のアクセントを他のパートと合わせてビシッと決めよう。



⑩(Gt.)：ここも❹と同様のギター・ソロ。Dの5～7小節目の速いフレーズは、譜面に指示がなくてもプリングやハンマリングを使ってスラーで弾いてもよい。


G (onC) G (onB) G
A
Vo.
Gt.-I
Gt.-II
Ba.
Dr.
gliss.
Arm.
cho.
cho.+P.
8va
C D G
P.
When
D.S.1.
Coda 1.
E
D


E E D E
Vo.
Gt.-I
Gt.-II
Ba.
Dr.
D.S.2.
Coda
D E G Am G C D C
With Chorus
E
li - ttle ro mance
Dance dance dance
Feel the heat of the rhy- thm Feel the beat of the band
gliss.
cho. cho.
2× only
gliss. gliss. cho. cho. P.
H.





⓫(Gt.)：2音のチョーキングだ。高音部のフレットでのチョーキングなので、それほどキツくはないはずだ。正確な音程になるようにすること。

⓬(Dr.)：この部分のバスドラは、16分音符を使って16ビートのようなパターンをプレイしている。

ONE GOOD LOVER

ワン・グッド・ラヴァー

by S. Pearcy, R. Crosby

■この曲のポイント

GUITAR：Gt-Iはバッキング・リフ、Gt-IIはギター・ソロの譜面になっている。この曲ではバッキング・リフも2本のギターによるユニゾンとなっており、実際に演奏する時、Gt-IIは休符の部分をGt-Iと同じ音符を弾くようにするとレコードのような厚いサウンドになるだろう。両方のギターとも、ディストーション・サウンドによるプレイだが、Gt-IIの方にはディレイがかかっている。Gt-Iは、力強いピッキングで、正確な8分音符を弾くようにすると、ノリの良い演奏ができるはずだ。

BASS：ミディアム・テンポの8ビート・ナンバーだ。ほとんどシンプルな8分音符弾きのパターンだが、Gt-Iとのユニゾンのリズムになっている部分もあり、リズムを正確に出すことが必要だ。音質は非常にヘヴィーな感じであり、ひとつひとつの音は大きなアタックをつけて弾かれている。ピックを使って、均一の強さでピッキングした方がいいだろう。

DRUMS：ミディアム・テンポの8ビートだ。基本パターンはシンプルなものだが、バスドラはダブル・ペダルを使って、16ビートのようなパターンがところどころに入っている。Ⓐの部分では、ハイハットをハーフ・オープンにして、アクセントを強調して叩いている。シンバルのアクセントなども譜面どおりにつけて、パワフルな演奏をしよう。フィルインのフレーズは割とシンプルなものばかりだ。



❶(Dr.)：このフィルインでこの曲は始まっている。16分音符の3連を使ったコンビネーションだ。この曲のテンポを決める重要なパターンなので、ハッキリとした、メリハリのある音で叩くこと。



❷(Dr.)：このような16分音符の連打がときどき出てくる。ダブル・ペダルを使ってプレイしよう。

❸(Dr.)：ハイハットはハーフ・オープンにして、アクセントを強調して叩こう。また、途中でオープンとクローズによるパターンも出てくるので注意。



❹(Ba.)：このパターンはGt-Iとユニゾンになっている。休符に注意して正確なリズムで弾こう。これと同じパターンはこの曲中に何度も出てくる。

❺(Gt.)：1回目のみに出てくるフィル・イン。ディレイをかけて、広がりのある音で弾くこと。


Em
Am G Am G Am
Vo.
Just think of love I just can't wait
I know this Ratt's caught in her trap
(1,2,) I wan- na know Why you do those things you do to me
H.
Gt.-I
Gt.-II
Ba.
Dr.
Em
Am
B
F G
She's one good lo - ver
yeah
P.



❻(Dr.)：この部分のスネアとタムは、フラム打ちでアクセントをつけて演奏されている。

❼(Gt.)：ギター・ソロ。❺と同様に、ディレイ処理されたサウンドになっている。



❽(Gt.)：かなり強いピッキングでプレイしている。ひとつひとつの音をスタッカートで弾こう。

❾(Gt.)：ピッキングの難しいフレーズだが、オルタネイト・ピッキングで、正確なリズムを心がけて弾くこと。



⓾(Ba.)：❹と同様のユニゾン・パターンの連続だ。ここではオン・コードの形になっている。

⓫(Gt.)：ここはAの音の連続だが、左手はダブル・チョーキングの形のままで弾こう。



⓬(Dr.)：バスドラは16ビートのパターンになっている。これもダブル・ペダルでないとちょっと不可能なリズムだ。

DRIVE ME CRAZY

ドライヴ・ミー・クレージー

by S. Pearcy, R. Crosby, W. DeMartini, B. Blotzer

■この曲のポイント

GUITAR：この曲では、AのコードでD#の音も使った少し不思議な響きのするリフが、メインのリフとなっている。イントロに出てくるのがそれだ。Gt-IIはイントロの4小節目からグリッサンドでスタートし、Gt-Iとのユニゾンで厚いサウンドを出している。Ⓐからのバッキング・リフは、Gt-IとIIでは少し違っているので注意。Ⓕやコーダの部分のGt-IIはソロ・パートになっているが、レコードではここも2本のギターでバッキングをしている。つまり、この曲は部分的に3本以上のギターが鳴っていることになる。しかし実際に演奏する時は、譜面どおりに弾けば2本のギターで十分だ。

BASS：少し速めの8ビートだ。シンプルな8分音符弾きが大部分なので、テクニック的には問題ないだろう。とはいうものの、リズムが小節の頭を喰っていたり、1拍半のシンコペーションを使ったキメの部分なども出てくるので、リズムが乱れないように、正確に弾こう。全体的に、図太くて存在感のある音でプレイされており、これもピックで弾いた方がベターだ。

DRUMS：リズムのノリは8ビートなのだが、バスドラは16分音符のリズムを踏んでおり、おそらくダブル・ペダルを使わないと演奏不可能だろう。テンポが少し速いので、ダブル・ペダルを使っても正確なリズムで16分音符を刻むのはかなり難しい。最初はテンポを落として練習するといいだろう。



❶(Gt.)：この4小節パターンが、この曲のメイン・リフだ。すべてダウン・ピッキングで、力強く弾こう。

❷(Dr.)：シンバルはアクセントをつけて、クラッシュで叩こう。バスドラは16分音符を使ったパターンだ。ダブル・ペダルを使わないとこれは無理。


A
G(onA)
A
Vo.
Gt.-I
Gt.-II
Ba.
Dr.
A
G(onA)
A
A
G(onA)
(4)
(4)





❸(Gt.)：この部分だけ硬いトーンになっている。これは、ブリッジ近くの部分を少しピッキング・ハーモニクス気味に弾いているためと思われる。



❹(Ba.)：他のパートとリズムがキメになっている。しっかり合わせよう。

❺(Dr.)：アクセントはリズムのキメになっている。必要以上にシンバル音を伸ばさないように。


D
C
A
G(onA)
C
Vo.
can't wait — to take
Drive me cra - zy, oh yeah —
Gt.-I
Gt.-II
Ba.
Dr.
C
A
G(onA)
C
to
That's all I hear you say
Drive me cra - zy, oh yeah —
And I can hear you say
‹4›
‹4›



❻(Ba.)：この部分の４分音符は、正確な４分音符よりも少し短めに弾くようにしよう。



❼(Ba.)：長く伸ばす音と、短く切る音の区別を明確にしてメリハリをつける。



❽(Gt.)：アームによるビブラートがかけられている。
おそらくアームを握りながら弾いていると思われる。



❾(Gt.)：２本のギターによるハーモニー・プレイになっている。しかし、下のパート(Gt-III)の方が音量が大きいので、このメロディがメインと考えていいだろう。

❿(Ba.)：シンコペーションのリズムで、Gt-Iとユニゾンになっている。すこし複雑なリズム・パターンだが、正確にプレイしてほしい。


G
A
G(onA)
Vo.
Gt.-I
Gt.-II
Ba.
Dr.
gliss.
yeah
16va
Picking Harm.
Arm.
D.S.
Coda
C
Drive me



⓫(Gt.)：ハーモニクスで弾いた音に、アームでビブラートをつけている。



⑫(Ba.)：ここもリズムが少し難しい。他のパートとしっかり合わせるように。

⑬(Ba.)：この曲の最後は、12/8拍子というリズムだ。このフレーズは、その前の小節からの延長と考えればいいだろう。

SLIP OF THE LIP

スリップ・オブ・ザ・リップ

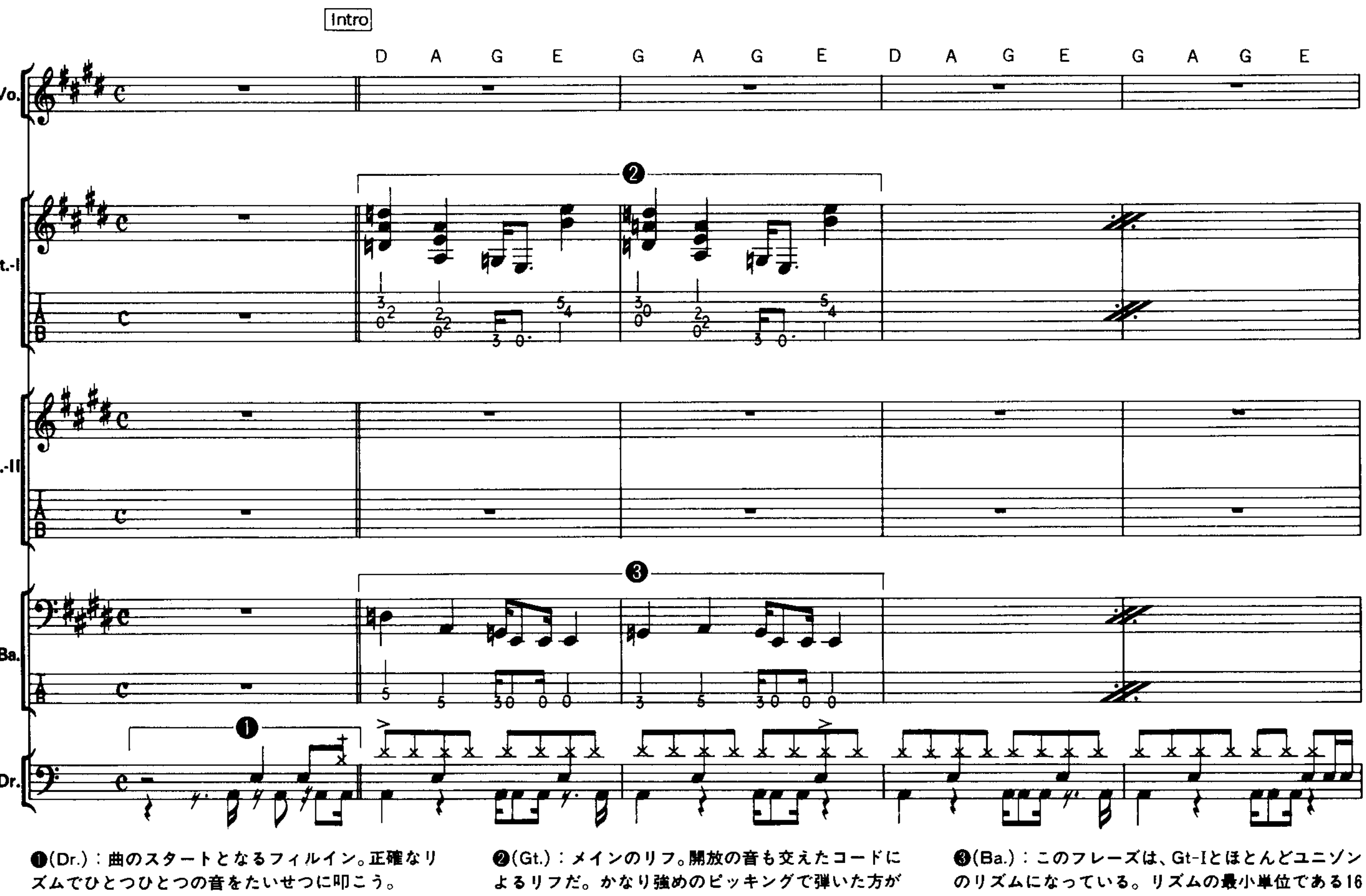
by S. Pearcy, W. DeMartini, B. Blotzer

■この曲のポイント

GUITAR：Gt-Iはバッキング、Gt-IIはソロ、というパート分けになっている。やはり、Gt-Iは2本のギターでプレイされており、かなり厚みのあるサウンドになっているが、これはショート・ディレイで音を左右に振っても同様の効果が得られる。ステージで演奏する場合は、Gt-IIのプレイヤーが休符の部分でGt-Iの譜面を弾くようにするといいだろう。Ⓒ、Ⓔのギター・ソロでは6連符などを使ったかなり細かい音符が出てくるが、この曲はテンポがゆっくりめなのでそれほど難しくはないはずだ。

BASS：この曲のような16ビートをノリの良いリズムで弾くためには、リズムの最小単位である16分音符を正確に弾くことがポイントだ。常に16分音符を感じながら弾くようにすること。バスドラやGt-Iとリズムを合わせる部分も多いので、各パートのノリを合わせることも大切だ。

DRUMS：16ビートなのでバスドラも16分音符を使った細かいパターンが多いが、テンポが遅いのでダブル・ペダルを使わないでも大丈夫だ。このくらいならシングル・ペダルで踏んでほしい。テンポがスローなせいか、比較的ノリの重い曲だが、リズムがもたったりしないように、常にジャストのリズムで叩くことを心がけてほしい。



❶(Dr.)：曲のスタートとなるフィルイン。正確なリズムでひとつひとつの音をたいせつに叩こう。

❷(Gt.)：メインのリフ。開放の音も交えたコードによるリフだ。かなり強めのピッキングで弾いた方が良い雰囲気になるだろう。

❸(Ba.)：このフレーズは、Gt-Iとほとんどユニゾンのリズムになっている。リズムの最小単位である16分音符を正確に弾こう。





❹(Gt.)：このリフも、2～3音のコードを主体としたものだ。譜面中、×印の音は左手で弦をミュートしてピッキングする、いわゆる「ブラッシング」の音だ。

❺(Ba.)：この4小節パターンも、❸と同様にGt-Iとリズムを合わせて弾いているものだ。ここは完全なユニゾンではなく、少しリズムがズレているところもあるので注意。



❻(Dr.)：ハイハットを開いて叩いている。ハイハットは次第に開けるようにするといいだろう。





❼(Gt.)：ギター・ソロの部分だ。6連符や7連符といった速いフレーズもあるが、ハンマリングやプリングなどのスラーをうまく使えば、それほど難しいフレーズではないはずだ。





❽(Ba.)：8分の連続だ。安定したリズムで淡々と弾こう。



❾(Dr.)：6連符を使ったフィルイン。シングル・ストロークでいいから、力強く叩こう。



❿(Gt.)：一見、かなり速いフレーズのようだが、実際には6連符のノリで、テンポも速くない。



⓫(Dr.)：リズムのキメになっている。ギター、ベースとも呼吸を合わせて叩こう。

⓬(Gt.)：エンディングのフィルイン・フレーズだ。フリー・テンポによる演奏であり、譜面のリズムはだいたいの目安と考えてほしい。

BODY TALK

ボディー・トーク

by S. Pearcy, W. DeMartini, J. Croucier

■この曲のポイント

美しいアルペジオから始まり、ヘビーなギターが加わると一転して彼らしいヘビーなサウンドになっていく。この曲では特にイントロ2や[B]でのバッキング・ギター・リフの組み立て方が素晴らしい。

GUITAR：バッキングのリフは、左右2人でユニゾンで弾くが、よく聴くと所々微妙に違うという、いつもの彼らの手法。完全にユニゾンの部分でも両者のノリの違い、ギター・トーンの違いから、たいへん厚みのあるサウンドになっている。

BASS：コードのルート音を8分で弾き続け、部分的にギターのリフをフォローし、「8分喰い」などのシンコペーションは8割くらいフォローするという、よくあるベースのパターンだ。若手のバンド(とはいってもすでにベテランかな?)にしては骨太の芯のあるベース・サウンドで、ズッシリと心地良い。

DRUMS：ベードラは規則的なようで意外に自由な叩き方(踏み方)をしている。ギターやベースのシンコペーションに必ず合わせるわけではなく、適度にフォローしているため、バンド全体のリズムが単調になることもなく、ドライブ感を損なうこともない。なかなかセンスの良いドラマーだ。



❶(Gt.)：派手にディレイをかけたアルペジオだ。ディレイ音のみエフェクト処理してあるので、12弦ギターのように聴こえる。タブ譜の他にもポジション、フィンガリングはいろいろ考えられるだろう。

❷(Ba.)：4～1弦の5倍音のハーモニクス・ポイントを使ったSE的なプレイ。SEと言っても、コードとぶつかる音はひとつも出てこない。

❸(Gt.)：1～3小節目まで、3/6、4/6の音をキープし、ベース音だけ動く。なかなか考えられた美しいコードの響きだ。





❹(Dr.)：たっぷり11拍にわたる白玉だ。ハイハットをフット・ペダルでキープするなどして、他のメンバーをリードした方がいいだろう。

❺(Gt.)：6弦ベース音のみ軽くミュート。その他の弦は少しもミュートをかけないように。

❻(Dr.)：偶数小節4拍目ウラが次の小節へ喰う、というシンコペーションのパターンをキープしている。


E
F#m7
E sus4
E
F#m7
Vo.
Gt.-I
Gt.-II
Ba.
Dr.
F#m7
E sus4
D


D A A E F#m7 Esus4
A
Vo.
Well I don't like feel-
Well I can't stop see-
Gt.-I
Gt.-II
P.
Ba.
Dr.
Straight
Esus4 E F#m7 Esus4 E
2×
- ing — Laced up in the ci - ty —
- ing — Street - lights on me —
D.S. × Top Cym.



❼(Gt.)：ここから転調。リフの弾き方は❺と同様。ベース音のみミュート。3、4弦のコードの音をしっかり前へ出すように。シンプルながら、3、4弦の音の出るタイミングの意外さから、たいへん面白いリフになっている。

❽(Dr.)：ここからベードラは8分の連続。ツー・バスならではのドラミングだ。力強さだけがポイントとなってくる。


Am7
G(onA)
Am7 G(onA) B♭
F sus4
F
Vo.
I see your Bo - dy Talk you make my Bo - dy — Talk, when you're ne-xt to me
Gt.-I
Gt.-II
Ba.
Dr.
F
Am7
D.S. ×
G
Bo - dy — Talk, I know your Bo - dy — Talk
(Bo dy talk)


G Gsus4 Gsus4 F
to
1.
F#m7
Vo.
You make my Bo - dy — talk when you're ne - xt tome —
Gt.-I
gliss.
Gt.-II
Ba.
Dr.
8
2.
F#m7
Cm7
C
Cm7
AM7
A#m7
B
Let — it out — you don't — know what — you're miss -
Make no mis - take — Let's make it clear
Picking Scratch
Gt. III



❾(Gt.)：１拍３連のリズムにのったフレージング。ちょっとリッチー・ブラックモアを思わせるブルージーなプレイだ。





⑩(Gt.)：⑨と同様、1拍3連だが、休符の位置とハンマリング、プリングのせいで、ちょっと変わったフレーズになっている。

⑪(Gt.)：⑩が発展した感じのフレーズだが、C♯音とC♮音が繰り返し使われるため、実に粘り気のあるフレーズになっている。



E
D
A
E
F#m7
Vo.
Gt.-I
Gt.-II
Ba.
Dr.
cho.
P.
F#m7
Well I don't like feel -
Pick Scratch
(8va)
Gt.III
Gt.I.II
D.S.
Coda
F
Am7
E
Gt.IV.

⑫(Gt.)：再び⑨と同様。


Am7 G(onA) Am7 G(onA) B♭ Fsus4 F
Vo.
Gt.-I
Gt.-II
Ba.
Dr.
cho.
F Am7 G
Bo-dy Talk, Bo - dy — Talk
8va
gliss.
tr.


G F Am7
Vo.
Bo - dy — Talk
Bo - dy — Talk
Gt.-I
cho. P. P. P. gliss. (8va) 8va
Gt.-II
Pick Scratch
Ba.
Dr.
F
Am7 G(onA) Am7 G(onA) B♭ Fsus4
Bo - dy — Talk
Bo - dy — Talk
Bo - dy — Talk



⑬(Gt.)：３弦の開放と、２～３弦のプリングのみを繰り返すだけで、これほどユニークなフレーズにしてしまうのはさすがだ。開放の音を完全に止めるのがポイント。

LOOKING FOR LOVE

ルッキング・フォー・ラヴ

by S. Pearcy, R. Crosby, J. Croucier

■この曲のポイント

ヘビーで印象的なリフに始まり、ラストも同じヘビーなリフの繰り返しで終わるため、曲全体が非常に重たい感じになってしまいそうだが、ハイ・トーンのボーカルとコーラスとでポップな仕上がりになっている。

GUITAR：白玉(ロング・トーン)でユニゾンやオクターブ・ユニゾンの音を弾くため、わずかなチューニングの狂いでもたいへん不快に響いてしまう。特にチューニングに気を配ってほしい曲だ。Ⓔのギター・ソロはオーソドックスながら、たいへん良く組み立てられている。

BASS：ギターのリフとユニゾン、ベースのみのリフ、コードをフォロー、というように、単調なリズムの中で動きのあるベースなので、フィンガリングに十分気を配って音の途切れることがないようにしたい。Ⓔのギター・ソロのバッキングでのベース・ラインは特に注意。

DRUMS：リズム・パターンを叩いている時は、だいたいアルバム中の他曲と同様なのだが、フィルインのフレーズは派手なものが多く、曲をよりヘビーに演出している。フラム打ちはタイミングに注意して、耳につかない程度に。



❶(Gt.)：ヘヴィーなリフ。低音弦の単音弾きは、微妙にピッキング・ハーモニクスの音を加えてやると、音がより前に出てくるものだ。

❷(Ba.)：ギターのリフとユニゾンだが、ベースの4弦のロー・ポジションは芯のある音で弾かないと、音が前に出てこない。右手、左手ともにカッチリと。



❸(Gt.)：2本のギターは完全にユニゾンではなく、高さが一部違ったりしている。2本を完全にピッタリ合わせようとするより、両者がそれぞれのリズム感でしっかり弾き、自然にノリが合うように。

❹(Ba.)：1小節パターンのラインを繰り返し、4小節目ごとにフィルインのラインを弾いている。2、3弦を弾く時は⁶⁄₀の音を完全に止めるように。



❺(Ba.)：コード・チェンジをなめらかにする音の動かし方に注目。こういうラインはできるだけ数多くストックしておいてほしいものだ。

❻(Gt.)：ヘヴィ・メタによく出るコード・フォーム。3度抜きで9度がついたこのコードは、あいまいな響きなので、メジャーでもマイナーでも使いみちは多いはずだ。



❼(Dr.)：フラムのタイミングに注意。



❽(Dr.)：ベードラの４連発は、スピードについていけるならツー・バスを使うよりワン・バスで力いっぱい踏んだ方が、重いノリが出やすい。
❾(Gt.)：ふたつの和音をスピーディに切り換え、しかも濁らないように弾くのは意外に難しいはずだ。フィンガリングを工夫しよう。

❿(Ba.)：ルート、♮3rd、５thを使った規則的なパターンを、コード・チェンジに沿って弾く。C、Dの時のフィンガリングをスムーズに。

⓫(Gt.)：カッコ内は、出ているようなそうでないような、あいまいな音だ。５度を強めにミュートして軽くピッキングする感じ。
⓬(Gt.)：ルーズなリズムで弾いているので、だいたいの符割で採譜してある。



⑬(Gt.)：4～2弦を一息にダウン・ピッキング、続いて2/20を4度チョーキング。思い切りが必要な部分だ。

⑭(Gt.)：スケール練習のようなフレーズだが、ちょっともたついた感じで弾いている(弾いてしまった)ようだ。

⑮(Gt.)：2/3のD音をキープしたままのコード・チェンジ。どちらのフォームもロック・ギターのロー・コードとしてポピュラーなものだ。



⑯(Gt.)：ディレイ・タイムをちょうど2拍分にセットしたディレイが1回、フレーズを追いかけるように出てくる。このディレイは曲のラストまでかけっぱなしだ。



⑰(Gt.)：「2 ： 5」は2拍のスペースに音が5つ、という意味。

⑱(Gt.)：オーソドックスな、いわゆるラン奏法だが、ため気味に弾いている。

⑲(Gt.)：単なるG7のアルペジオだが、ポジションのとり方でこんなフレーズに仕上がる。これはいろいろと応用できるはずだ。

7TH AVENUE

セヴンス・アヴェニュー

by S. Pearcy, W. DeMartini

■この曲のポイント

GUITAR：この曲もやはりGt-IとIIとのユニゾンによる厚いサウンドのリフが主体となっている。しかし、これは完全なユニゾンではなく、部分的にIとIIが異なったフレーズを弾いているところもあるようだ。[A]の部分のフレーズはベースのものとは違った音が使われており、かなりラフに合わせているという雰囲気だ。[D]や[F]のエンディング近くではギター・ソロになっていて、ここは6連符を多用したフレージングだ。この3連のノリは曲全体に共通したものなので、このノリをつかむことが大切になってくる。なお、この曲はレコードでは譜面の音より半音低く演奏されている。おそらくチューニングを半音下げて弾いているのだろう。

BASS：スロー・テンポの16ビート・ナンバーだ。ゆったりとしたノリであり、少し3連気味にハネたリズムに聴こえる部分もある。この16分音符のノリを大切にプレイしてほしい。[A]の部分で出てくるパターンが、この曲でメインに弾かれているものだ。16分音符のシンコペーションしたリズムなので、他のパートともしっかりとノリを合わせるようにしよう。

DRUMS：シンバルやハイハットが1小節に8つしか入っていないので、8ビートのように見えるが、ノリは完全に16ビートである。この曲で基本になる16分音符は、3連符のように少しハネたノリになっている。これは完全に3連のノリではないが、少し味つけ程度に3連のノリにしよう。このノリは、他のパートともしっかり合わせておく必要がある。



❶(Gt.)：スタッカートのついている音は、右手で軽くミュートしながら弾くこと。

❷(Dr.)：8分音符の、タムによるちょっとしたフィルインだ。1音1音を力強く。



❸(Gt.)：このパターンでは、ベースの音と少し違っている。これは意識的に変えられたものだろう。

❹(Ba.)：リズムはGt-IIとユニゾンだが、音が少し違っているので注意すること。

❺(Dr.)：リズムのキメ。他のパートとユニゾンのリズムなので、しっかりと合わせよう。


Em
G
Vo.
— un - til the sun-light — No - thin' else to say Put — tin' out till mor - nin' — But — then just walk a way—
— her strings of pearls And — trips — a-round the world Got —them round your fin - ger — That's my kind of girl —
Gt.-I
Gt.-II
Ba.
Dr.
B
C F G A C F G A G
(1,2,) I've seen your pictures in the ma - ga-zines — I knew it must be — you —



❻(Gt.)：オクターブ奏法を使ったフレーズだ。弾かない弦を左手でしっかりミュートしておくことがポイント。

❼(Dr.)：2回目のみタイで次の小節につながっている(他のパートも同じ)。



❽(Gt.)：ギター・ソロだが、ここはもう1本別のギターがGt-Iとユニゾンでバッキング・リフを弾いている。

❾(Gt.)：速いフレーズが連続しているが、ほとんど6連符を使ったフレーズなので、このノリを崩さないように。



⑩(Ba.)：16分音符を使ったフレーズ。この曲は16ビートなので、ここに限らず16分音符を正確に弾いてほしい。


Em
E
Vo.
Yeah You —, you look for trou-ble — You, you're al-ways dan-cin' — Look — who's fa-shion con-scious — True
Gt.-I
Gt.-II
gliss.
Ba.
Dr.
Em G
F
C F G A
— al-ways ro-man-cin' —
I got love I want to show you
C F G A
I know it's up to — you


A
Em G A
Vo.
You know I'm dy - in' to meet you, girl —
Gt.-I
Gt.-II
Ba.
Dr.
gliss.
cho.
P.
8va
C F G A
G
Em G A
On Se - venth A - ve - nue —
On Se - venth A - ve - nue


A C F G A G
Vo.
On Se - venth A - ve - nue
Gt.-I
Gt.-II
cho.
P.
gliss.
Ba.
Dr.
Em G A C F G Em
You know I rea - lly want to meet you girl
On Se - venth A - ve - nue
Arm.
8va

IT DOESN'T MATTER

イット・ダズント・マター

by S. Pearcy, J. Croucier

■この曲のポイント

GUITAR：この曲でもギター2本のユニゾンによるリフが出てくる。イントロやⒶの部分のメイン・リフは、ディレイをかけて弾いているようだ。リフそのものは単音とコードの組み合わせによるものだが、この単音は右手の腹の部分を使って、少しミュート気味に弾くといいだろう。Ⓓのギター・ソロでは、開放弦の音をうまく使ったフレーズも出てくる。これは開放弦ならではのものなので、必ずタブ譜どおりのポジションで弾くようにしよう。

BASS：フレーズは単純なものが多いので、テクニック的には問題なく弾きこなせるだろう。ただし、やはり気をつけてもらいたいのがリズムだ。常に正確な8分音符を弾いて、ギターなどともぴったりとノリの合ったプレイをしよう。音はヘヴィーだが、歯切れ良い音を出すように、ピックを使って弾こう。

DRUMS：オーソドックスな8ビートの曲だ。パワー全開で力強い演奏をしよう。フィルインのフレーズも比較的単純なものが多い。どのようなフレーズでも均一の音で叩くことを心がけてもらいたい。16分音符のフィルでは、シングル・ストロークで正確なリズムで叩いてもらいたい。ところどころにシンバルによるアクセントが入っているが、小節の頭以外のアクセントは雰囲気で入れられているようだ。あまり譜面に神経質になる必要はないだろう。



❶(Dr.)：バスドラによる16分音符はここだけにしか出てこないので、ダブル・ペダルを使わなくてもこの曲は演奏可能だろう。

❷(Gt.)：この曲のメイン・リフ。ユニゾンで演奏されているが、2小節目だけ少し音が違うことに注意。また、このフレーズにはディレイが少しかかっているようだ。

❸(Ba.)：休符を生かしたフレージングになっている。譜面どおり正確なリズムで弾こう。

❹(Dr.)：シンバル4つ打ちのパターン。大きなノリで、1音1音、力強く叩こう。



❺(Dr.)：ここからはシンバル8つ打ちのパターンになる。シンバルにところどころアクセントがつけられていることにも注目。



❻(Gt.)：単音とコードの組み合わせによるバッキング。単音はすべて右手で軽くミュートしながら弾くこと。





❼(Ba.)：2拍3連のリズムだ。ここはドラムとユニゾンのリズムになっている。

❽(Dr.)：2拍3連のキメのリズム。ベースとユニゾンなので、しっかりと合わせよう。



❾(Gt.)：ハーモニクス音をアームで変化させている。タブ譜のように、1弦4フレットでハーモニクスするとよいだろう。

❿(Ba.)：❸と同様の、休符を生かしたフレージングだ。

⓫(Gt.)：3弦開放のG音をアーミングしたもの。タイミングに気をつけてアーミングすること。



⓬(Gt.)：２音にわたるチョーキングだ。多少キツくても、しっかりF#まで上げるように。

⓭(Dr.)：このフィルインは、ハイハット・ペダルを踏んでリズム・キープしよう。


Em G Em G D(onF#)
Vo.
Jet set, up - set Mak-in' bets it ne-ver ends You've had e - nough,you see
Gt.-I
Gt.-II
Ba.
Dr.
D.S.
Coda
F
G Am
It does-n't ma-tter It does-n't ma-tter
cho.
8va
H.
gliss.


G
Am
Vo.
It does-n't ma-tter
It does-n't ma-tter
Gt.-I
(4)
Gt.-II
H. H.
Ba.
(4)
Dr.
G
C
Am
Turn - in' out the — lights
For — the week-end nights —
cho.
Repeat & F. O.

TAKE A CHANCE
テイク・ア・チャンス

by S. Pearcy, W. DeMartini, J. Croucier

■この曲のポイント

GUITAR：16分音符が3連のノリになっているので注意してもらいたい。バッキングはやはりほとんどユニゾンで弾いている。これは完全にユニゾンではなく、時々違っている部分もあるので要注意。この曲のギター・ソロはディストーションの他に、ディレイもかけられている。かなり細かい音符も出てくるので、ピッキングやフィンガリングに気をつけて、正確なリズムで弾くように。

BASS：この曲のポイントは、やはりリズムだろう。基本的に3連のノリなのだ。そのことを忘れずに、正確なリズムをキープしよう。ベースもかなりディストーション気味のヘヴィーな音を使っているようだが、力強いピッキングの割には軽快なノリに聴こえる。これは16分音符が3連のノリになっているため。全体的に音を短めに弾くといいだろう。

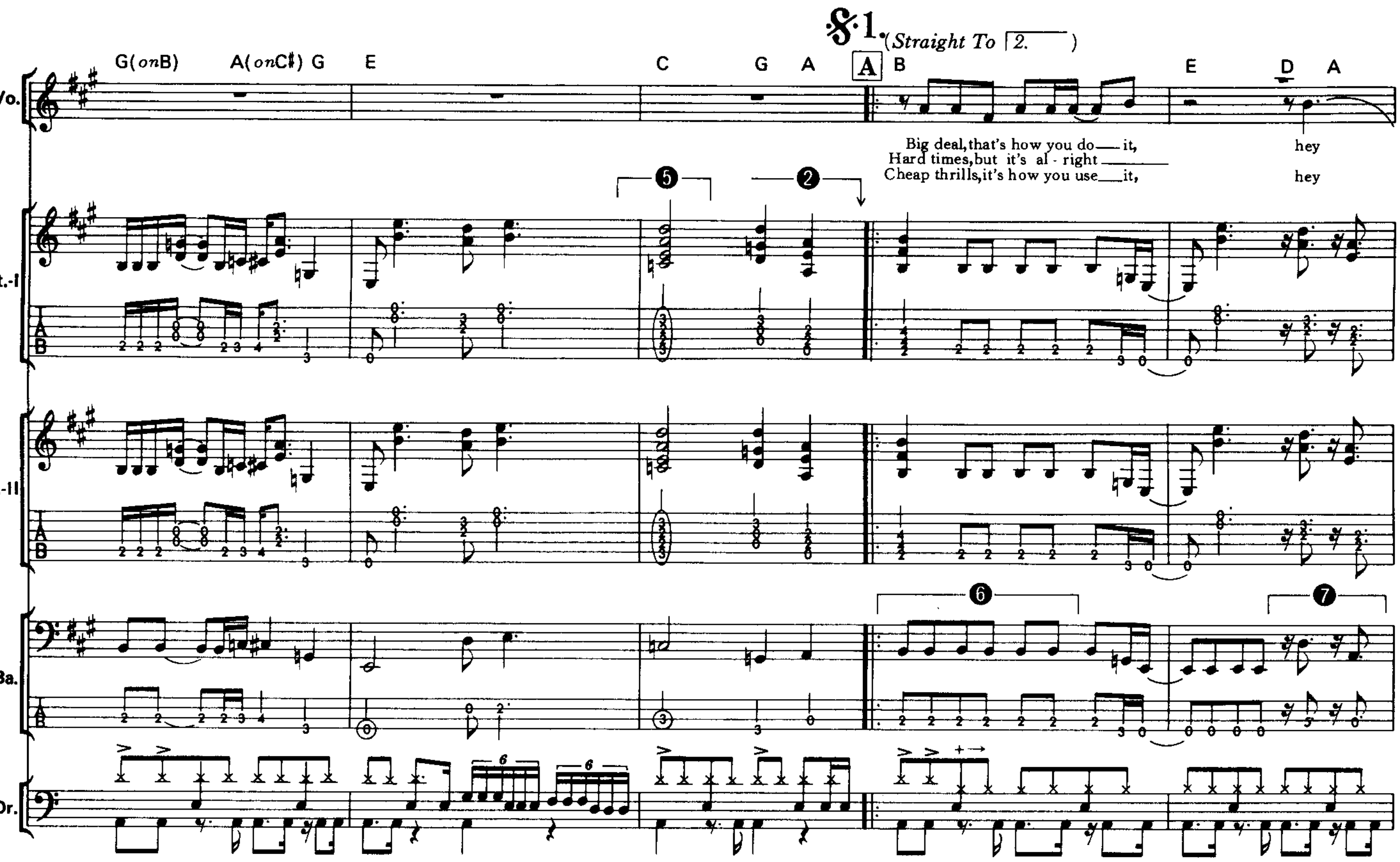
DRUMS：ベースのところでも述べたように、3連のノリの16ビートになっている。特にバスドラはこの16分音符を多用しているので、リズムが乱れないように注意しよう。このバスドラは、やはりダブル・ペダルを使った方がよさそうだ。バスドラがこれほど多く入っていると、リズムが雑になりやすい。この曲は3連のノリなので、ドタバタした感じにならないように注意して叩こう。



❶(Dr.)：6連符のフィルインでこの曲はスタートしている。この6連のリズムがこの曲の基本となっているので、正確に叩いてもらいたい。

❷(Gt.)：この曲のメイン・リフだ。譜面に指示があるように、この曲の16分音符は3連のノリになっているので注意すること。

❸(Ba.)：この2小節パターンがメインのリフだ。16分音符は3連のノリになっているので、正確なリズムで弾くように。





❹(Dr.)：このように、バスドラのリズム・パターンは16分音符を使ったものが多い。3連のノリだということを忘れずに叩くこと。このようなバスドラのリズム・パターンが多いので、この曲ではダブル・ペダルを使った方がよさそうだ。

❺(Gt.)：このコードはCのコードに6thと9thの音が加えられたのだ。

❻(Ba.)：このように8分音符が連続して出てくるパターンでは、1音1音をレガートに弾かずにスタッカート気味に短く切って弾くようにしよう。

❼(Ba.)：このリズムはギターとしっかり合わせて弾くように。



❽(Ba.)：この曲ではこのようなフィルインがかなり入れられている。とかくリズムが狂いやすいので注意すること。

❾(Dr.)：バスドラが16分でシンコペーションしている。このリズムは他のパートとも合わせるので、できるだけ正確なリズムで叩こう。



⑩(Gt.)：ギター・ソロだが、このバッキングはもう1本別のギターもGt-Iとユニゾンで入っている。このギター・ソロの音にはディレイがかけられているようだ。


F♯
A
E
Vo.
Gt.-I
Gt.-II
Ba.
Dr.
p
g
cho
8va
h+p
(8va)
D.S.2.

Coda 2.



⑪(Dr.)：この部分、ハイハットはオープンさせて、
1音1音アクセントをつけるつもりで力強く叩こう。


E
F♯
A
Vo.
o - ver and o - ver
Hey hey hey
Gt.-I
Gt.-II
cho
(8va)
Ba.
Dr.
E
F♯
A
Big deal, that's how you do it
Good luck, if that's e - nough



⓬(Gt.)：ピッキング・ハーモニクスで弾いている。
これはピッキングと同時に、ピックを持った右手親
指を弦に当てるようにするとよい。

ENOUGH IS ENOUGH

イナフ・イズ・イナフ

by S. Pearcy, W. DeMartini, R. Crosby, J. Croucier

■この曲のポイント

GUITAR：この曲も半音下げたチューニングで演奏されている。イントロはクリアなサウンドのギター1本だが、この部分はリズムが複雑なフレーズなので、正確なテンポで弾くようにしよう。Ⓐの11小節目からはディストーションをかけて、一気に盛り上げるように。また、Ⓔ、Ⓕの部分にギター・ソロがあるが、ここはディレイをかけて広がりのあるサウンドでプレイしよう。

BASS：静かな感じのイントロで始まるが、ベースがスタートする部分から曲は盛り上がっている。ベースは常に力強く演奏すること。Ⓐの部分ではリズムを合わせるところもあるが、その他ではほとんど8分音符弾きだ。この8分音符はスタッカートではなく、レガート気味に音を伸ばして弾こう。音質はあくまで太い音を心がけ、ピックを使ってアタッキーにプレイしてほしい。

DRUMS：Ⓐの途中からスタートしているドラムは、8ビート・パターンを基本とした、非常にパワフルな演奏だ。特にⒶではシンバルのアクセントを強力につけて、迫力のあるプレイをしたい。Ⓑからのパターンは、シンバルやハイハットを1小節に8つ打つ、8ビート・パターンとしてはシンプルなものだ。ところどころにシンバルのアクセントが入って曲を盛り上げている。Ⓖの部分だけハイハットを16分で刻んだ16ビート・パターンになっている。これは両手でハイハットを叩けばいいだろう。



❶(Gt.)：ノン・ディストーションのクリアなサウンドにコーラス系のアタッチメントをかけて演奏されている。この部分はリズム的にもかなり複雑なフレーズであり、ギター1本だけで演奏されているのでリズムが狂わないように注意しよう。


Vo.
Gt.-I
Gt.-II
Ba.
Dr.
E B G A
A
F♯ E
I like the way you talk when you un - dress me
F♯ E F♯ E B
I'd like to take it off, Yeah
I like the way your fin - gers Run through my hair
If you care



❷(Ba.)：Gt-II、ドラムとユニゾンのリズムで迫力あるアクセントをつけている。正確なリズムで弾くと同時に、力強いピッキングを心がけよう。

❸(Dr.)：シンバルのアクセントは、ベースやGt-IIと合わせて、思い切り強調する。

❹(Dr.)：3連のタムとバスドラのコンビネーションによるフィルイン。タムはダブル・ストロークで叩こう。

❺(Dr.)：スネアとタムの8分打ち。クレッシェンドさせて、次第に盛り上げよう。

❻(Gt.)：2本のギターによるユニゾン・プレイ。リズムを正確に。



❼(Ba.)：オクターブで厚いサウンドを出している。
ピッキングしにくければ、上の音を３弦７フレット
で弾いてもいい。



❽(Gt.)：コード・トーンではなく、テンション・ノートを使って弾いている。かなり自由な発想で音を選んでいるようだ。



❾(Gt.)：このギター・ソロの部分にはディレイをかけている。


F♯m
A
E
F♯m
Vo.
Gt.-I
Gt.-II
Ba.
Dr.
A
E
F♯m
8va
cho
cho
cho
(8va)
4



❿(Gt.)：アクセントの位置をギター、ベース、ドラムで合わせている。リズムに注意。



⑪(Dr.)：16分でシンバルを叩いている。Ⓖでは16ビートのパターンになっているのだが、ここではまだ8ビートのノリだ。

⑫(Dr.)：両手を使って16分でハイハットを刻んでいる。この部分だけ16ビートになっているわけだ。

⑬(Gt.)：このエンディング・フレーズは、他のパートとも合わせてビシッときめよう。

⑭(Dr.)：ハイハットのオープンとクローズを使ったアクセント。歯切れの良いシャープな音で。